

フィリピン研修報告書

二十世紀学専修4回 濱希望

今回の研修は今まで参加させていただいた研修とは違って楽しいだけでなく、さまざまな人と関わるなかで辛いことやきついこともあったものだったと思います。

わたしは今回初めてフィリピンを訪れ、空港からホテルへ向かうタクシーでまず最初の衝撃を受けました。タクシーが交差点で止まっていると、窓をコツコツと叩く音がしました。見ると、道路の真ん中であるにも関わらずタクシーの側に立ってこちらをジッと見ている10歳ほどの子どもがいます。ほかにも兄弟らしき子たちや赤子を抱えた母親など何人もが道路を彷徨って車に乗っている人にお金を乞うていました。多くのフィリピン人女性がエンターテイナーとして日本に来る背景、フィリピン国内の貧困をここで実感しました。

この研修では日本に来るフィリピン人の移民問題に関係する50人以上の方々にお話を聞きました。元エンターテイナーの方や今から結婚ビザで日本へ行く女性、JFCの子たちはインタビューの内容が自分のプライベートに踏み込むようなことであっても快く答えてくださいましたし、日本への移民送り出しに関わった日本人の方やNGOの方々も丁寧に説明してくださいました。しかし、インタビュー対象者の中には同じ事象に対して違う立場をとる方も多くおり、お話を聞いていくなかでどのように解釈したらいいのか、何を信じたらよいか分からなくなることもありました。わたしは日本で学習しているときフィリピン移民問題の搾取の側面、被害の側面にしか目を向けられていなかったのですが、フィリピンでインタビューをするなかで貧しさから抜け出すための手段として日本への出稼ぎや移住が実際に必要とされる側面を強く意識しました。多くの問題だとされることは善悪を簡単に判断できるものでなく、人々にはそれぞれの信じる正しいことや信念があるのだと気づきました。それゆえに根本的な解決は難しく、私たちにできることは問題に取り組み続けること、迷い考え続けることなのだと思います。日本に帰ってからもJFCの子どもたちへの学習支援を通して関わりを持ち続けたいと思います。

また、私にとって一つ印象的だった出来事が大統領官邸を訪れた際にガイドの方にフィリピンでの戦時の日本軍の行いについて説明されたことです。ガイドさんが日本軍がキリノ大統領の家族に行った行為について語ったあと、ひとりの女性が「日本の友人たちと写真を撮ってもいいかしら？」と近づいてきました。過去に他の東南アジアの国々を訪れた際にも思いましたが、日本人の思っているよりも戦時の日本人の行いは東南アジアの国々の人々にとって未だに大きなインパクトを持っているということを実感しました。

最後に、サポートしてくださった国際交流推進室の皆様、普通では出会えないような人々と私たちを繋げてくださった雨笠さん、ホテルで真剣に議論したりいっしょに笑ったり楽しくすごした参加者のみんな、ご自身の経験やフィリピンについての知識を語ってくださったマリル先生、睡眠時間を削って奔走してくださった安里先生に御礼を申し上げます。